私とポロネーズ

坂田 朋優

小さなころからショパンの音楽が好きだった私が、ポーランドの先生に初めてレッスンを受けたのは大学4 年の終わりでした。大学の客員教授として2年間日本に滞在していたハリーナ・チェルニー=ステファンスカ先生が任期を終える前に、所属のクラスに関係なく、希望者にはレッスンをしていただけることになったのです。私はすぐに希望を出して数回のレッスンを受けることができ、それ以外もできる限り多くのレッスンを聴講しました。

帰国される前には学生たちとのお別れ会が開かれ、最後にみんなで踊ったのがポロネーズでした。長老から踊るという習慣にならって先生方からペアで踊り始められたのが印象的でした。日本人ばかりで、本来の踊りとは少し違ったかもしれませんが、雰囲気に触れることができただけでも貴重な体験であったと思います。

ポロネーズは、ホゾーニ(chodzony)という農民の間で踊られた舞踊に関係していると説明されることも多く、ホゾーニはポーランド語の chodzić(歩く)という言葉に由来しています。ポロネーズというと、ショパンの「軍隊ポロネーズ」のような堂々とした威厳や誇りを示すものとイメージする方も多いと思いますが、感傷的なメロディーで書かれたポロネーズもあります。それを代表するのが、ミハウ・クレオファス・オギンスキの「祖国よ、さらば Pożegnanie Ojczyzny」で、作曲されたのは第二次分割後の1794 年でした。華やかなポロネーズと感傷的なポロネーズは一見すると対照的でも、そのどちらにも祖国を思う気持ち、愛国的精神といったものが込められているのに変わりはないと思います。

今回「午後のポエジア」で演奏したのは、アンジェイ・ワイダ監督の映画『パン・タデウシュ物語』で使われていたヴォイチェフ・キラル作曲のポロネーズ(ピアノ編曲版)です。初めてこの映画を見た時から、その旋律が忘れられず、いつか弾いてみたいと思っていた作品でした。 (さかた・ともまさ)

「午後のポエジア」の風景から

①「森へ行きましょう Szła dzieweczka」②トゥヴィム「おおきなかぶ Rzepka」③同「一、二の、三 Raz, Dwa, Trzy」
(参考 ブログ記事)【WEB 検索】空への軌跡・吟遊記 第 90 回例会午後のポエジア

ポーランド&ニッポン歳時記 30

実りの年

今年、向かいのアカシアの枝によく二羽の鳩が飛んできます。その梢に届きそうな我が家のベランダで、以前二匹の雛が巣立っていったのを思い出します。自分の人生の果実を見られるのは素敵なことです。

gałąź akacji　アカシアに
znów chyba są u siebie　また二羽鳩の
te dwa grzywacze　里帰り
Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

za oknem słońce　レポートの
na biurku usypiają　山と居眠り
prace studentów　陽は外に
Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

夏雲や泣く子わめく子稚児の列
薔薇の名はマリーアントワネットかな
さまざまに夏花のはしやぐ雨きたる
岩見沢市、霜田千代麿

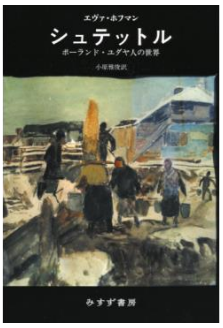
《新刊紹介》

エヴァ・ホフマン著『シュテットル～ポーランド・ユダヤ人の世界』

小原雅俊訳、みすず書房、2019.3

「ポーランドの風景に一面にちりばめられた〈…〉数多くの〈…〉シュテットル、これらの村や町におけるほど、(第二次世界大戦中の)破壊が徹底的であったところはほかにない。これらの村は今もなお存在している。それらの多くは今なお美しく、強い地理的な望郷の念ももっともと思われるほどだ。〈…〉いくつかのシナゴーグはまだ立っている。そのうちのいくつかは放置され、見捨てられて今にも崩れそうになっており、あるものは保存され、修復を施されて過去の威厳を取り戻している。村境の外には、雑草と野生の灌木が傾いた墓石の上に一面につるを伸ばした、小さなユダヤ人墓地を見つけることができる。ユダヤ人がナチスによって駆り集められ、射殺された雑木林をポーランド人農夫が私に教えてくれる。〈…〉これら、あちこちにある不可思議な遺物は、何らかの消滅した古い文明を想起させる。しかし、かつてここに存在した、生命が脈動したユダヤ人の世界はもはやない。小さな商店や屋台、ひしめきあう人々、荷馬車や馬、イディッシュ語やヘブライ語で発せられる響きはもはやない」

「ホロコースト後の記憶の中で、ポーランドは特別な位置を占めている。ほかならぬここに、戦前、世界で暮らすユダヤ人の大多数が住んでいたのであり、ほかでもないここで、ヨーロッパのユダヤ人の絶滅が起こったからだ。〈…〉ほかならぬポーランド



に、絶滅の標的にされた人々の大多数が暮らしていたからである」(「序文」から)

『シュテットル』は、真の多民族・多文化国家であったポーランドで、ユダヤ人がポーランド人の間で、ポーランド人とともに暮してきた六百年の歴史を背景に、ポグロムの、次いでホロコーストの残虐に見舞われて歴史の闇に没してしまったポーランドの東部国境地帯にあった「シュテットル=小さな町」ブランスクの壮烈な歴史から見えてくるポーランド人とユダヤ人の長い共存と分離の実験についての、稀代の語り部エヴァ・ホフマンの、ことのほか興味深い本だ。

本書にはポーランド・ユダヤ人の歴史のすべてがあると言ってよい。ユダヤ人の歴史のみならず、ポーランドの過去と現在、未来を理解するためにも、ぜひとも読んでいただきたい本である。

(小原雅俊、東京外国語大学名誉教授)

♫NPO 法人まずるか北海道第 8 回東日本大震災被災者支援コンサート「私たちは忘れない!」(ピアノ:遠藤郁子)で、日本ポーランド国交樹立 100 周年に因み、在札幌ポーランド人のみなさんがポーランド国歌を合唱しました。

光塩学園天秘ホール 2019.3.9

ポーランド&ニッポン歳時記 29

巣作り

最近、我が家の窓の向かいの梢に二羽のカササギが飛んできて、巣を作り始めました。仲間たちの後を追って飛び回ることなく、せっせと小枝を運んできては、丁寧に積み重ねたり、整えたりしています。毎朝、彼らの作業を眺めるのが楽しみです。

błękitne niebo	青空や
dwie sroki wiją gniazdo	カササギが巣を
na naszym drzewie	新築す

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

jasny poranek	朝夢の
granicę snu przekracza	境越えくる
klangor żurawi	鶴の声

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

黎明の四時打つ時計余寒かな
新元号蛇穴を出づ日本かな
伊右衛門の茶を飲み春の句を作る

岩見沢市、霜田千代麿

ポーリッシュポタリーショップ

松山 莞太

冬にしては珍しい、雨が滴る夜にミュンヘンクリスマス市を訪れた。その一角に、アグニェシュカ・ポヒワさんが運営する、ひときわ風情のある落ち着いた雰囲気のポーランド陶器のお店があった。

多くの人を立ち止まらせるその陶器たちは少々黄みがかっており、花や水玉といったカラフルな模様を浮かべている。形は大小様々あり、お茶碗からマグカップ、お皿まで多種多様である。ポヒワさん曰く、日本食から洋食まで幅広いジャンルの料理に合うという。確かに、カラフルでありつつ落ち着いたお皿は、ゆったりと過ごしたい食事の時間にならどんな料理もマッチしそうで、お寿司やスクランブルエッグなどを乗せても合いそうだ。

この陶器の起源は中世にまで遡る。ポーランド南部の町で取れた砂を粘土にし、様々な色のついた模様をスタンプにして表面に配置して焼き上げる。この伝統の陶器は昔から受け継がれており、何度か波を繰り返しながら今ポーランドでは再びブームになっているという。ポヒワさんの実家でも使われていたそうだ。

この陶器は丈夫で、オーブン・電子レンジ・食洗機・冷凍庫ともに大丈夫で、実用にも十分耐える作りとなっている。そしてお店では、模様や形の質が良いもののみを取り扱っているそうだ。これから寒くなる季節、このポーランド陶器で家庭の食卓に一縷の温かみを添えてみるのはいかがだろうか。

（まつやま・かんた 2018.12.4）

ポーランド&ニッポン歳時記 28

猫

我が家の近所に野良猫が何匹か棲んでいます。住民たちが餌をやって養っていますが、最近彼らに小屋まで建ててやりました。これでもう猫たちも厳しい寒さから身を守れることでしょう。

na wielkiej klapie　ごみ箱の
śmietnika w środku zimy　蓋に鎮座す
kot jeszcze większy　冬の猫
Monika Tsuda, Poznań　ポズナン市、津田モニカ

krople na szybie　窓たたく
deszcz do taktu przygrywa　雨に合わせて
skrzypiec głosowi　バイオリン
Piotr Wrzeciono, Warszawa　ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

うらめしや子持ち鰰くち開けて
若僧の歳末勤行いきいきと
熊笹の風除ビュウビュウ鳴りどおし
岩見沢市、霜田千代麿

平取町立二風谷アイヌ文化博物館で今秋

第25回特別展「ブロニスワフ・ピウスツキのみた平取」（仮称）を開催

近代のアイヌ文化研究をリードした人類学者のひとりであるブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)は、1903 年の北海道調査などで沙流アイヌと交流し、多くの学術資料を後世に残しました。

本展では、明治後半代を中心とした氏の調査概要や時代背景・地域住民との出会い・収集資料(音声、写真、民具等)の紹介を通して、一連の研究の今日的意義を考えます。また、B.ピウスツキを介して近年活発に行われるようになった二風谷アイヌ文化博物館とポーランド各地の博物館との交流の成果を広く一般に紹介します。

開催日時は 2019 年 10 月 1 日（火）～12 月 1 日（日）、場所は当館内の特別展会場です。

2019年は日本・ポーランド国交樹立100年の記念の年ですので、当展示でもできる限り、日本語とポーランド語を併記するよう計画しています。

北海道在住のポーランドの方々及び関係者にもぜひご覧いただきたいと思いますので、今後とも当館事業にお力添えをよろしくお願いいたします。

（平取町立二風谷アイヌ文化博物館学芸員 長田佳宏）

ナタでも使われていますから、「月光」ソナタとショパンの遺作のノクターンが同じ日に登場したことが単なる偶然とは思えませんでした。本日の演奏会では遺作のノクターンこそありませんが、第2部の最後で弾かれるエチュード作品 25-7 もこの嬰ハ短調ですので、この調独特の心に染みるようなノスタルジックな雰囲気を味わっていただけるでしょう。

今日のプログラムには、もうひとつとっておきの曲があります。それは第3部でお聴きいただくポーリーヌ・ヴィアルドの歌曲です。ヴィアルドはパリでショパンにピアノを習った女性ですが、もともと家系はスペイン人で、旧姓をガルシアといい、恵まれた音楽一家に育ちました。3オクターブ半の声域を持つメゾソプラノ歌手として有名になりましたが、作曲も手掛け、絵も描けば、数カ国語で詩も書くという多才の人で、ベルリオーズやブラームスから絶讃されたほか、ロベルト・シューマンの妻クララ・シューマンは「私がかつて出会った最も才能ある女性」といっており、ロシアの文豪ツルゲーネフを虜にした女性としてもよく知られています。

このポーリーヌは、ショパンと暮らしていたフランスの女流作家ジョルジュ・サンドからも一目置かれていて、サンドの仲介でルイ・ヴィアルドというパリのオペラ劇場の監督と結婚しました。二人の結婚式にはショパンとサンドがそろって出席し、ほとんど仲人の役を果たしたようですから、いかに彼らの人間関係が親密だったかがわかります。

こんなふうにショパンたちと親しかったポーリーヌは、ショパンのマズルカから名曲 12 曲を選びだし、フランス語の歌詞をつけて歌うという、それまで誰も思いつかなかったことをしました。記録によりますと、ショパン本人がピアノ伴奏してポーリーヌが歌うという、夢のようなコンサートが、ショパンの生涯の絶頂期にあった 1842 年2月にパリでありましたし、ポーリーヌはいなかったものの、ショパンの生涯最後のコンサートに当たる 1848 年のロンドンでもこの作品が取り上げられたそうですので、ショパン公認の作品といってよいと思います。

このあと松井亜樹さんが歌われるのはその中の2曲で、作品 33-2「Aime-moi 私を愛してください」と作品 7-3「Faible coeur 弱い心」です。私はこの歌を CD でしか聴いたことがなく、ライブで聴くのは今日が初めてですが、松井さんもこれらの曲を歌われるのは初めてだそうですので、今日お越しの皆様は本当にラッキーだと思います。松井さんはこれまで、ショパン自身が作った歌曲を数多く歌ってこられたので、そのご経験が今日の歌唱に生かされるにちがいありません。

最後に、今年 2018 年は、18 世紀末に消滅したポーランドという国が第一次世界大戦後の 1918 年に独立を回復して 100 年という、特別な記念の年に当たりますので、ポーランドの音楽を集めたこの音楽会を開催できることは大変うれしいことで、きっと天国のショパンも喜んでくれていると思います。どうぞ最後まで演奏会をお楽しみください。

（みうら・ひろし）

創立 30 周年記念演奏会の出演者

ポーランド&ニッポン歳時記

錫婚式

結婚十周年を迎えました。節目の記念日は家族が集まる良い機会です。皆たいてい様々なプレゼントを持ち寄りますが、今回その中にはチェリーとクランベリーがありました。さっそくチェリーはパイにし、クランベリーからはジャムを作りました。

przelotny deszczyk	雨やどり
owady się schroniły	我が家の軒で
pod naszym dachem	虫の群

Monika Tsuda, Poznań　ポズナン市、津田モニカ

pod mgiełką skryty	雲の間に
taniec marsa z księżycem	月夜とダンス
ponad drzewami	火星かな

Piotr Wrzeciono, Warszawa　ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

呑み干すはラムネに溶けし憶ひ出よ

バラ園のバラの呼吸で蝶とべり

扉開け本尊引っ越し夏の寺

岩見沢市、霜田千代麿

《ポーランド古都めぐり》

ポーランド「最初の都」ポズナン

津田 晃岐

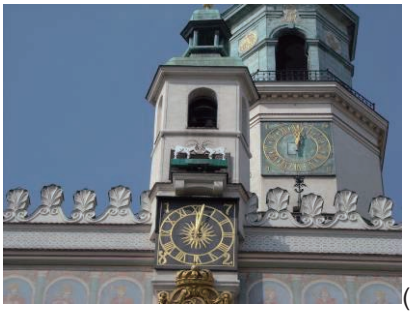
（写真 1)ポズナンと言えばまず、毎日正午に旧市庁舎の時計台に現れる「山羊」が有名。伝説どおりに二匹が角を突き合わせること十二回。

（写真 2）つづいて、ヴァルタ川の中洲に建つ司教座聖堂には「ミェシュコ一世の洗礼盤」が残る。このピャスト王朝創始者の洗礼とともに、キリスト教国ポーランドが誕生した（966 年）。当時ポズナンが国政上占めていた立場から、ポズナンを「最初の都」と見なす学者は多い。

（写真 3）また、旧市街の一画「プシェミスウ山」は 13 世紀の王都の跡で、現在はポーランド王プシェミスウ二世（在位 1295～96）の居城が再現されている。

（写真 4）さらに三国分割時代の遺産「帝城」も、ドイツ皇帝プロイセン王ヴィルヘルム二世（在位 1888～1918）の威勢を伝え、古都ポズナンの繁栄を偲ばせる。その皇帝の城の一部が今では、共産政府に対する 1956 年の市民蜂起「ポズナン暴動」の博物館（写真 5）になっているのも面白いところだ。

ポズナンの歴史は、そのままポーランドの歴史になっている。　（つだ・てるみち、ポズナン、2018.3）


(1)

(2)

(3)

今秋ポーランド旅行を計画しています。

ワルシャワ、クラクフのほか、オプションの訪問地を考えるための参考に、ポズナンの街について紹介していただきました。

写真⑴津田撮影 ⑵ By Radomil - Praca własna, CC BY-SA 3.0 ⑶ By Poznaniak - Praca własna, CC BY-SA 2.5 ⑷ CC BY-SA 3.0 ⑸津田撮影

(4)

(5)

ポーランド&ニッポン歳時記 26

鳥の餌付け

この冬、鳥の餌台を設けました。我が家のベランダが鳥たちの間で意外な人気になっています。飛んでくるのは――シジュウカラ、ゴジュウカラ、カケス、カササギ、そして時々つがいのシラコバト。でもなぜか普通のスズメが姿を見せないのです。

bezlistne drzewo　朝の声
bogatki na gałęziach　裸の枝の
z samego rana　四十雀
Monika Tsuda, Poznań　ポズナン市、津田モニカ

na śnieżnym puchu　新雪に
dróżka narysowana　狐の跡が
lisa śladami　描く道
Piotr Wrzeciono, Warszawa　ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

凍道はツルツルすべる人の哀しみ
ペガサスの疾走エゾの馬橇かな
大蜆（しじみ）月のぽぽなはニューヨーク
岩見沢市、霜田千代麿

の中でも物価が安く、多くの外国人が気軽にヨーロッパを楽しめ、かつ独自の食文化や景観を楽しめる。国際化と言うと聞こえは良いが、ポーランドや日本のようなある種閉鎖的な国柄は、外の文化圏から来る人間から見れば非常に独創的個性的であり何より面白い。国際化は大いに結構だが、まず自分の文化を守り子孫に伝えるのが一番大切であろう。

かくして私の二週間のポーランド紀行は幕を閉じた。空港でエヴェリナは別れを惜しみ涙したが、来る12月、今度は彼女のほうが日本に来る予定だ。一体彼女が本物の日本を見て何を感じるか、今から楽しみである。彼女の日本旅行はまた機会があれば皆様にお伝えしたい。

（おおつか・こうすけ、2017.9.30）

写真（上）エヴェリナと筆者（中）ポーランド料理・ピエロギ（下）クラクフ・聖マリア教会

ポーランド&ニッポン歳時記

キノコ狩り

今秋はキノコが豊作でした。キノコ狩り(grzybobranie)という伝統は『パン・タデウシュ』にも描かれています。私も子供のころに参加したことがあります。後でキノコの「帽子」と「足」に糸を通して部屋に干すと、家中が森の香りでいっぱいになったものです。

zapach dzieciństwa　ビゴス鍋
podgrzybki prosto z lasu　思い出が沸く
w garnku bigosu　キノコ狩り
Monika Tsuda, Poznań　ポズナン市、津田モニカ

kropla po kropli　雨だれの
deszcz rytmy wystukuje　リズムに踊る
do liści tańca　木の葉かな
Piotr Wrzeciono, Warszawa　ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

老松や冬霧（ふゆもや）けって龍昇る
若水やノミ研ぐ鬼師鬼を彫る
往きし人窓の向かふの雪明り
岩見沢市、霜田千代麿

第19代札幌コンサートホール専属オルガニスト

マルタン・グレゴリウスさんに聞く

徳田貴子

マルタン・グレゴリウスさんはポーランド・グディニア出身、2017年9月1日キタラの専属オルガニストとして札幌にやってきた。キタラでのデビューコンサートでは即興演奏を含む素晴らしい演奏を披露された。はるばるポーランドから札幌にやってきたマルタンさんの素顔に迫るべく、去る10月23日、初雪が降るなか札幌パークホテルでお話をうかがった。

行間を読む日本人のコミュニケーションは素敵

マルタンさんは日本での生活は初めてである。日本といえば歴史ある建物が多いイメージだったが、札幌は予想外に現代的で綺麗な街でびっくりしたという。特に札幌駅と大通り駅をつなぐ地下歩行空間には「寒いから皆さんこちらを歩くのですね」と感心したそうだ。食べ物は「ラーメン、寿司、てんぷら、しゃぶしゃぶなど美味しいものばかりで大好きです。でも、納豆は苦手ですね」とか。

日本人の印象は、大変礼儀正しく良い方ばかりで、日本人の精神性が好きだと何度もおっしゃっていた。特に、日本人は仕事の上でも「できない」ことを「できない」とはっきり言わないことに気づいて、ヨーロッパの人々はもっと正直に思ったことをはっきり言うけれど、「日本人の行間を読むようなコミュニケーションの仕方は素敵だ」と感じたという。筆者も米国に 10 年間留学して当初は「No」とはっきり言えず、欧米の方とスムーズにコミュニケーションをとれなかったことを思い出して、意思疎通の方法の違いを「素敵なこと」と受け入れてくださるマルタンさんにとても親しみを感じた。

日本の観客には演奏者に対する敬意を感じる

コミュニケーションの取り方は観客の反応にも現れる。筆者は留学中、アメリカ人の歌手の友人から、ドイツでシュトラウスの歌曲を歌ったら聴衆も一緒に歌いだしてびっくりしたと聞いたことがある。日本のお客さんの反応にも違いはあるのだろうか。

「デビューコンサートでは、最後に《赤とんぼ》や《ソーラン節》など日本の有名なメロディーをふんだ

人々のおびただしい苦難、弱い人々を守らない社会とその弱い人々の逞しさ豊かさ――歴史は苦手で秀吉や信長などにはあまり興味はないのですが――これらについては強く心を動かされるのです。

これから可能な限り協会のイベント等に参加させて頂き、書かれた物、写された物等と出会いたいと思っています。入会をお誘い頂いた松山様に感謝すると共に、会員の皆様のご健康をお祈りします。

（みずかみ・じゅんや）

協会の行事に参加して

佐藤 清一

「ポーランド映画祭 2017 in 札幌」でワイダの『灰とダイヤモンド』『夜の終りに』などを鑑賞し、久山宏一さんの解説もわかりやすく面白かったです。

その後、5 月には詩劇『ピウスツキ』が江別で行われ、詩の朗読とピアノやアイヌ民族の楽器ムックリなどの演奏があり、内容的にもとても深みのある感動的なものでした。とくに、サハリンに流刑されたピウスツキとアイヌの女性との結婚、彼が刑を終えてポーランドに帰る際の別れ、その悲しみにもかかわらず人間愛にみちた詩の朗読が印象的でした。

ワイダファンの一人でもあって、多くの作品を見てきました。先日は彼の遺作『残像』を鑑賞しました。党の政治体制が大学教授の職を奪い、芸術家の表現の自由を奪っていく様が活写されていました。

ポーランド文化協会の行事に参加させてもらって、その国の文化を多様な視点から紹介されていることに感心しています。それが入会の直接的動機ですが、もう一つはポーランドでいわゆる「社会主義」体制が崩壊した、その数年後にワルシャワ、グダニスクなどの都市、さらにアウシュヴィッツ強制収容所などを見学して、歴史に翻弄されながらもたくましく生きる民衆の姿への想いとも重なって、今回入会の運びになりました。（さとう・せいいち）

♫〈後援〉第 19 代札幌コンサートホール専属オルガニスト

マルタン・グレゴリウス（ポーランド出身）**デビューリサイタル**

J.S.バッハ：パッサカリアとフーガ ハ短調 BWV582
M.グレゴリウス：即興による舞踏組曲 ほか

会場：札幌コンサートホール *Kitara* 大ホール
日時：2017 年 10 月 7 日（土）14:00～15:30（13:30 開場）

入場料（全席指定）：一般 1,000 円、各種割引 500 円

ポーランド&ニッポン歳時記

湖畔で

ポズナンの中心からほんの少し離れた所に湖がある。夏にはそこで水着になって日焼けしたり、泳いだりする。ちょっと信じられない自然とのふれあいかもしれないが……。

leżak nad wodą　寝そべれば
lipcowy wietrzyk igra　入道雲と
z pierzastą chmurą　風遊ぶ
Monika Tsuda, Poznań　ポズナン市、津田モニカ

stukot klawiszy　キーボード
na ekranie laptopa　パチパチ――画面に
już wschodzi słońce　陽が昇る
Piotr Wrzeciono, Warszawa　ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

反逆の大地炎暑のポーランド
残像はマルクス、レーニン雷と雹
サキノフは今何してる夏の雲
岩見沢市、霜田千代麿

主との出会いは少し異なっていた。彼はペテルブルクでは知人のパニン伯爵の入れ知恵で、散歩中のエカチェリーナ 2 世(在位 1762–96)の前に登場する。この仕組まれた出会いの場で彼は女帝の尊大さを感じとり、プロシア王フリードリヒ 2 世を批判したり、女帝の趣味に自分の趣味を合わせたりと相手の自尊心を擽ることに余念がない。ポーランド国王との偶然の出会いや自然な会話と比べると、女帝との出会いはいかにも「謁見」といった印象を与える。

スタニスワフ・アウグストはまだ国王になっていなかった青年期にやはり帝位につく前のエカチェリーナの愛顧を受け、彼が王位についた背景には彼女の支援もあったとされる。カサノヴァは当時のワルシャワに自立の歩みを進めようとする意気込みを感じつつも、エカチェリーナが「どういう主張をもちだすかと目をこらして待っていた」と述べ、スタニスワフ・アウグストについても、ロシアの横暴に抵抗しない柔弱な国王と評したのだ。

とはいえカサノヴァは国王に好印象をもった。イタリア贔屓の国王は借金で苦しい生活を強いられていたカサノヴァにそっと金包みを渡し、それ以来カサノヴァは毎朝この「善良な」国王の衣裳室に出かけ、話し相手を務めることになった。

平穏だった彼のワルシャワ滞在は衝撃的な結末をもって幕を閉じる。ブラニツキという当時国王の寵臣だった男と決闘する羽目になり、カサノヴァは手を負傷したが、相手の傷はさらに重く、危うく一命を落とすところであった。この決闘はワルシャワ中の知るところとなり、カサノヴァは敵方につけ狙われ、おまけに当時「国王の領土」の内では「決闘は死をもって禁じられて」いたので、この地を立ち退かざるを得なくなる。国王が国外逃亡を助けるため金銭的援助を行い、カサノヴァはワルシャワを出てドレスデンへと向かった。

カサノヴァのワルシャワ滞在記は彼の回想録の中でもひときわ興味深い。というのも、強権のロシア君主エカチェリーナ 2 世の宮廷を間近に見た直後の訪問であったため、ポーランド国王の柔和な気質と協調的な執政の描写にはロシア女帝との対比が際立っているからである。二人の君主にはむろん気質の相異があったが、それに加えて、武力によって帝位を奪取した君主と、その庇護のもと投票で選出された君主という境遇の違いもあった。カサノヴァといういかさま師、教養人、そして 18 世紀ヨーロッパのコスモポリタンの眼差しは、そうした二人の君主像を確実に捉え、ロシア帝国と濃密な関係にあった 18 世紀ワルシャワの風景を活き活きと描き出しているのである。

かなざわ みちこ 神戸市生まれ。東京大学・同大学院修了。東京大学助手、放送大学助教授をへて 1996～東京大学大学院教授(スラヴ語スラヴ文学)、2016～東京大学名誉教授、2000～01 ワルシャワ大学客員講師。編著書:十八世紀ロシア文学の諸相 水声社、編訳書:可愛い料理女:十八世紀ロシア小説集 彩流社など。

ポーランド&ニッポン歳時記

大人の塗り絵

この二、三年、大人向けの塗り絵がちょっとした流行になっています。郵便局でも、スーパでも、どこでも売っています。リラックス効果があるとのことで、私も嵌ってしまいました。

esy floresy うねうねと
pojawiają się pączki 出てくる蕾
kolorowanka 塗り絵かな
Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

już po deszczyku 雨上がり
poranek jasny pełen 澄み切る朝に
głosu skowronka 雲雀鳴く
Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

ポーランド語シ・チュ・ジュが多い寒雀
柳の芽ジプシー音楽旧市街
都鳥今日はヴィスワの中洲にゐ
岩見沢市、霜田千代麿

の木の生い茂った島が田んぼの上に過去を封印して突き出ています。この場所の精神について、芭蕉の言葉は予言のように聞こえます――巨大地震と苦しみの時が大地と人に触れ、人々は死に、山は崩れ、大地は広がり、この奇妙な象の入り江のように、すべてを、海さえも飲み込む……

「象潟　これまで山水海陸の美景のある限りをことごとく見集めてきて、今や象潟（きさがた）に対して詩心を苦しめ悩ます次第となった。酒田の港から東北の方へ、山を越え、磯を伝い、砂浜を踏んで、その間十里、日もようやく傾きかけるころ、着いて見ると、汐風が砂を吹き上げ、雨は朦朧（もうろう）とうちけぶって、鳥海の山も隠れてしまっている。古詩に詠ずるごとく、暗やみの中を手さぐりをするようにして透かし見る眼前の雨中の夜景も「雨もまた奇なり」の詩句の通り、こんなにもすばらしいとすれば、さらに雨の晴れたあとの「晴れて偏（ひと）へに好し」というけしきはどんなにめざましかろうと期待をかけて、わずかに膝（ひざ）を入れるばかりの小さな漁師のあばら屋に宿って、雨のあがるのを待つ。

その翌朝、天気はからりと晴れあがって、朝日がはなやかにさし出るころ、象潟に舟を浮かべた。まっ先に能因島（のういんじま）に舟を漕ぎ寄せて、能因法師が三年間隠栖（いんせい）した遺跡を尋ね、向こうの岸に舟をあがると、「花の上漕ぐ海士（あま）の釣舟（つりぶね）」とおよみになった桜の老木が、今もそのまま西行法師の記念を残している。水辺に御陵があり、神功（じんぐう）皇后の御墓という。また、そこの寺を干満珠寺といっている。だが、ここに皇后が行幸されたことは、まだ聞いたことがない。どういういわれのあることだろうか。この寺の表座敷に坐ってすだれを巻き上げてながめると、象潟の風景はことごとく一望のうちに見わたされ、南には鳥海山が天を支えるかのごとく高くそびえ立ち、その影が映って水上に横たわっている。西はむやむやの関が道をさえぎってその先は見えず、東には堤を築いて秋田に通う道がはるかに続いており、海を北にひかえて外海の波が潟にうち入る所を汐越と呼んでいる。入江の縦横各一里ばかり、そのおもざしは松島に似通っていて、しかしまた違ったところがある。いわば松島は笑っているような明るさがあり、象潟は憂いに沈んでいるかのような感じだ。さらにいえば、寂しさの上に悲しみの感を加えて、その地のたたずまいは傷心の美女の俤（おもかげ）に似ている。

象潟や雨に西施（せいし）がねぶの花
汐越や鶴脛（つるはぎ）ぬれて海涼し」
（『おくのほそ道』125−126 ページ）　（訳　安藤厚）

写真 1 羽黒山随神門 (羽黒町観光協会 HP より)
写真 2 月山弥陀ヶ原湿原 (photo: Kagioka Ryumon)
写真 3 象潟 稲田の海に浮かぶ松の木の生い茂った島

ポーランド&ニッポン歳時記

冬うららプレジデントはジョーカーか
無一物ともいかず冬用意かな
ビビビビと増毛の海の鎌鼬

鎌鼬（カマイタチ。寒風などにあたって皮膚が鎌で切られた様に傷つくことをいう。冬の季語）

岩見沢市、霜田千代麿

ワイダ監督と猿八座

佐渡島からやって来た文弥人形の猿八座に翻訳と通訳を頼まれた 2004 年のこと。ポズナンとヴァウブジフに続き、クラクフの日本美術技術センター“マンガ”で『信太妻』の公演が行われた際に、ワイダ監督と出会うことができました。僅かな間でしたが、十一月の寒い日に監督も交えて一座の皆と温かい一時を過ごせたことは、貴重な思い出となりました。

polskie zaduszki　ささやきと
słychać szepty modlitwy　トランペットの
ktoś gra na trąbce　祈る墓地
Monika Tsuda, Poznań　ポズナン市、津田モニカ

w gaju nad rzeką　黄葉の
jeż poranek ogląda　朝を見回る
spod złotych liści　針鼠
Piotr Wrzeciono, Warszawa　ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ